

## 助産所における色彩環境に関する検討 — 診察室および玄関兼待合室の視感測定を実施して —

小野清美, 奥田博之, 光岡美智子<sup>1)</sup>

### 要 約

これまで助産所管理に関する事柄において色彩環境についてあまり触れられてこなかったが, 色彩環境はよい環境を作りだすことができる要素である。そこで, M助産院の診察室および玄関兼待合室の色彩環境の視感測定を実施した。M事例でわかったことは, ソファカバーや観葉植物・造花などの有効な活用を図っていたが, 人形やスリッパなどの小物は目立つ色彩であった。また, 大きなポスターは周囲の色彩環境を左右していた。以上のことから, 今後, よい色彩環境にするために留意すべき点は以下の7項目である。

- 1) 観葉植物の有意義な活用をすること。
- 2) カーペットやソファカバーなどで色彩変化を楽しめるが, その素材にも留意すること。
- 3) 色彩の散乱を防止し, 空間内の色彩秩序を保つこと。
- 4) 子どもなどを対象にした物の場合には, 対象者の視線にあわせた色彩計画をすること。
- 5) 癒しの環境作りに造花は手軽に利用できる。
- 6) 大きなポスターを貼る時には, その色彩の影響を考慮し添付場所を選択すること。
- 7) 診療場所の色彩は色相より彩度には留意し, 「落ち着き」「おだやかさ」「ほっとする温かみ」などを得られるような工夫をすること。

---

キーワード: 助産所, 色彩, アメニティ

---

### 目 的

療養環境を表す「アメニティ」という言葉が使われているが, このアメニティの尺度や水準は生活水準や価値観によって変遷する。これまでにアメニティを「ネセシティ (必要不可欠なもの)」「アメニティ (快適性, 利便性を増大させるもの)」「ラクジャリー (贅沢なもの)」の3段階に分け議論が進められてきた<sup>1)</sup>。特に, 1990年(平成2)以降からは広く快適な療養環境を保障する仕組みが, 診療報酬などによって設定された関係もあってか<sup>1)</sup>, 病院建築は大きく改善が見られ, 医療関係者の意識の向上が推察されるという<sup>1)</sup>。

病院や診療所と並び助産所は医療法2条により助産業務をなし, 11条により助産師により経営され管理されなければならないことになっている<sup>2)</sup>。構造設備基準について23条に規定され, 清潔その他衛生

上遺憾のないように管理するようになっている<sup>2)</sup>。

従って, 助産所のアメニティは当然, 運営する助産師によって管理され配慮していかなければならない事柄であるが, これまでに助産所管理において色彩環境についてあまり触れてこなかった。しかし, 助産所管理には色彩診断を上手に活用することで, よい環境を作りだすことができる要素となりうる可能性がある<sup>3)</sup>ので, アメニティの改善の一つとして考慮していく必要がある。

建築やインテリア関係の色彩環境の報告では壁, 天井, 廊下, 扉や家具などのような構造物や大型家具などの色彩の分析をしたものは見られるが, 通常使用されている小物まで含めて検討されていない。助産師が助産管理をする上には構造物や大型家具などは不動の物で対応できないが, 生活用品の色彩を留意すればよき環境を作り出すことが可能となるの

で、生活場面で活用している小物を含めて検討した。M助産院の診察室および玄関兼待合室の色彩環境の視感測定を実施し、色彩診断をしたので報告する。

## 方 法

### 1. 調査概要

- 1) 視感測定日は2001年10月1日および2日に実施し、当日は晴天であった。
- 2) 対象場所は岡山市街地にあるM助産院とし、助産所長には同意を得て色彩診断を実施した。本助産院は交通機関が便利な場所にあることから岡山市内のみでなく近隣の市町村の人の利用者も多い。分娩件数は月3～5件ぐらいあり、乳幼児相談および乳房管理の来院者は月に20件ぐらいある。
- 3) 助産所は昭和36年に建築された築40年の木造建築であり、診察室は8畳、玄関は約4畳、褥室は6～8畳の部屋を4室所有している。

### 2. 視感測定方法

2001年度A版 塗料用標準色見本帳(ポケット版)を使用した。本見本帳は建築物・設備器機・インテリアなどの塗装によく使用させる色を選び350色を収録し、2年毎に発行されているものである。

本見本帳の表色系はマンセル値で表されている。マンセル値とは世界的に使用されている表色系の一つであるマンセルシステム(Munsell System)に基づくものである。これは色を三属性(色相・明度・彩度)に基づいて感覚的に等距離になるように配置し、尺度化したカラーシステムである<sup>3)</sup>。これはアメリカで開発されたもので、アメリカや日本などで工業規格として広く採用されている表色系であるが、この尺度は微細な色別分類となっている。

マンセル値の表記法は「Hue Value/Chroma (色相 明度/彩度)」のように表す。マンセル色相はR(赤)・Y(黄)・G(緑)・B(青)・P(紫)の5色相を配列し中間にYR(黄赤)・GY(黄緑)・BG(青緑)・PB(青紫)・RP(赤紫)などの5色相をおき計10色相を定めている<sup>4)</sup>。また、明度は1の黒から9.5までの白に区分され高数値になるほど明るくなっており、彩度は無彩色を彩度0とし、数値が増えるほど鮮やかな色となっている。例えば、R(赤)を例にとると1Rは短波長のRP(赤紫)に近い赤となり、10Rは長波長のYR(黄赤)に近くなる。5Rはどちらにも偏らないR(赤)となる。

### 3. 診断方法

「玄関兼待合室」および「診察室」における測定値は、色相、明度、彩度などの色彩の三要素が明確になるので、その数値から色彩調和の基本や法則を見つけ診断をする。その診断内容は、例えば、色彩の対比の有無、同一(統一感の強い、まとまりのある同一系)・類似(穏かなまとまりや、なじみやすさのある類似系)・対照(コントラストや主張のはっきりした対照系)などの色相・明度・彩度の配色の有無、色彩の同化、色彩の軽量・硬柔・寒暖など色彩の様相間効果、面積効果、視認性、誘目性、進出色および後退色、膨張色および収縮色など、色彩の持つ幾つかの要素の有無を見つけ確定し、色彩診断をした。

## 結 果

玄関兼待合室および診察室などの視感測定結果は表1に示すとおりである。また、玄関兼待合室の色相と明度については図1のとおりである。

玄関は民家の普通の洋式の感じであるが、壁や床は黄赤系の「10YR 6/10」、「7.5YR 7/14」などの色彩を主体にした木目調となっている。壁ぎわには黄の花と緑系「2.5G 4/4」、「5G 4/8」、「5G 5/10」、「10G 4/10」などの観葉植物をおき、ブルー系「5B 8/4」を主体にした「母乳育児を成功させるための10か条」(72×51cm)や母親が子どもを抱いたピカソの絵などのポスターが貼られ、柱にはボディが赤系の「10R 5/14」を玄関の柱に抱きつかせるビニール製の人形(通常この人形はダッコチャンと呼ばれているので、以下、ダッコチャンと略記。)を飾っていた。

待合室となる玄関の廊下の端には洋式のソファが1脚と籐の椅子および電話台が置かれ、ここにはピンク系「5R 7/6」の電話があった。窓を背に置かれた大きなこのソファは木目調の壁や床にあわせたブラウン系「10R 3/2」で揃えたレザーのものに、黄系の「5Y 8/13」のソファカバーをかけていた。また、スリッパ台には白地に黒のチェックの大人用のスリッパが6足、子ども用の「6RP 6.5/7.5」のピンク系や「5B 6/8」、「10B 7/6」などのブルー系のスリッパが6足あった。

つまり、玄関兼待合室の全体は壁や床の木目調やソファやソファカバーなどの色相は「黄赤」、「赤」、「黄」などの暖色系となっているが、ポスターやスリッパは寒色系となっていた。そして、「緑」の中性色は観葉植物であった。大きなソファは低

表1 玄関兼待合室および診察室における視感測定

場所	インテリア	視感測定結果(マンセル値)
玄関兼待合室	壁と床	10YR6/10 7.5YR7/14
	観葉植物	2.5G4/4 5G4/8 5G5/10 10G4/10 5Y7/6
	ダッコチャン	10R5/14
	電話	5R7/6
	ソファー	10R3/2
	ソファーカバー	5Y8/13
	スリッパ	6RP6.5/7.5 5B6/8 10B7/6 white
	ポスター	5B8/4
診察室	天井	N7
	壁と床	10YR6/10 7.5YR5/6
	造花	2.5Y8/12 5R3/10 10RP7/4 10RP5/14 5RP3/4 white
	スチール製の机	5PB7/2
	ポスター	5B6/8 5B4/8 10B7/6
	カーテン	white
	スクリーン	10B8/4
	診察台	white 5G4/8 5R4/12 10YR7.5/6
	写真	2.5G5/6

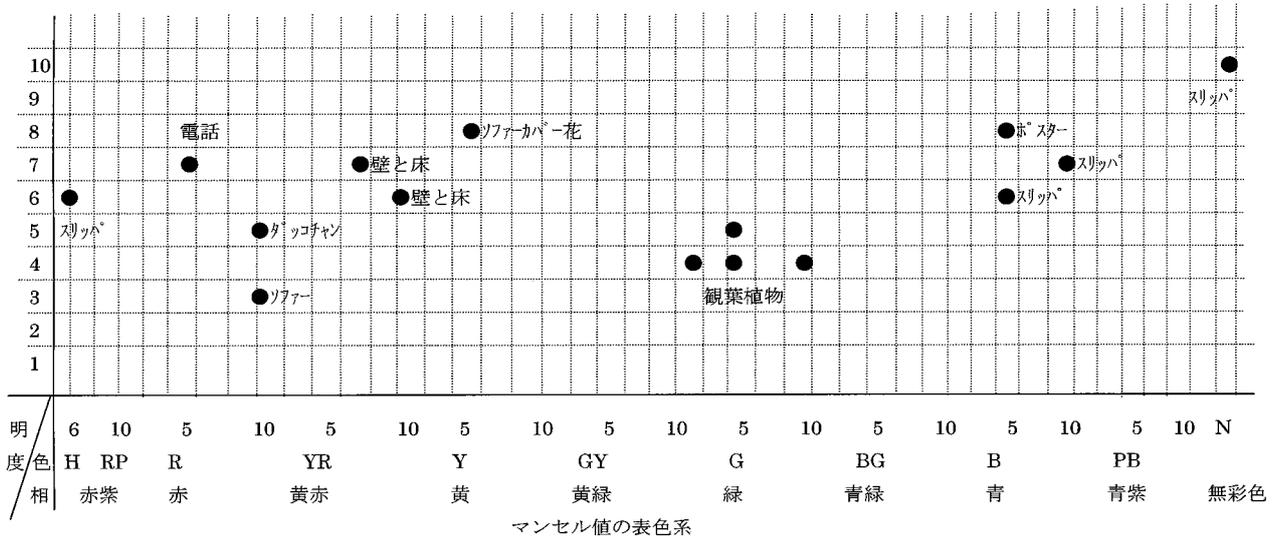


図1 玄関兼待合室の色相と明度

明度であるがソファーカバーは「黄」の高明度で高彩度となっていた。また、スリッパはソファーカバーの「黄」の補色であるブルー系が置かれていた。

一方、診察室の色相と明度については図2のとおりである。診察室は8畳ぐらいの広さである。白いタイル作りの小さな流し台が部屋の片隅に1つあり、天井は灰色の「N7」で、壁と床は黄赤系の「10YR 6/10」、「7.5YR 5/6」などであった。入室すると診察ベッドが正面にあり、ベッドを背に記録机がある。部屋全体に20×30cm, 40×50cmなどの大きさの花の

みの造花が8箇所飾られ、インテリアとしてその存在は大きな位置を占めていた。その造花の色彩は診察台周辺では黄系の「2.5Y 8/12」が2箇所と赤系の「5R 3/10」が2箇所、スチール製の記録機の周辺は赤紫系「10RP 7/4」、「10RP 5/14」、「5RP 3/4」、「white」となっていた。

スチール製の机は青紫系の「5PB 7/2」が置かれ、窓には大きなポスター(72×51cm)が3枚あり、その色彩はブルー系で「5B 6/8」、「5B 4/8」、「10B 7/6」などであった。

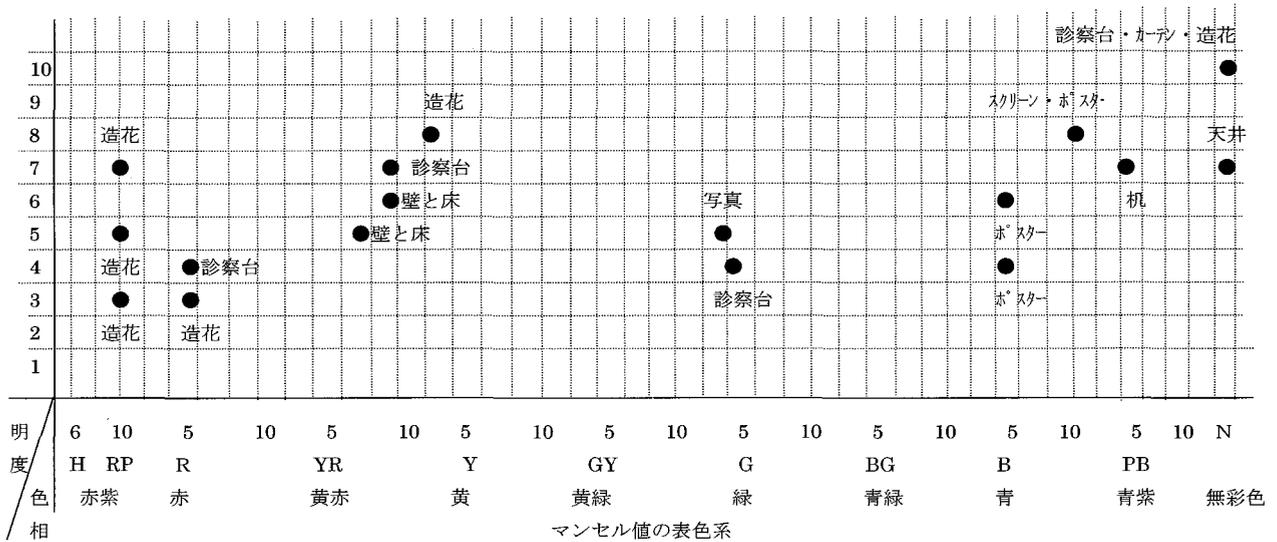
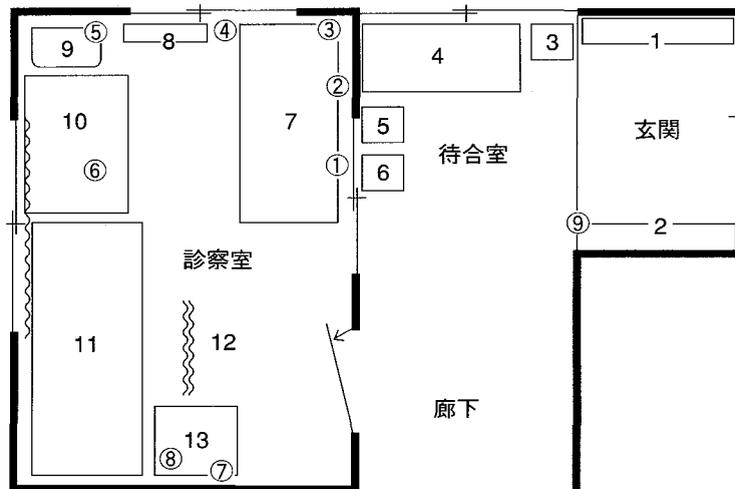


図2 診察室の色相と明度

資料1 玄関兼待合室および診察室の配置図



- |           |         |
|-----------|---------|
| 1. 下駄箱    | ①造花     |
| 2. 下駄箱    | ②造花     |
| 3. スリッパ台  | ③造花     |
| 4. ソファ    | ④造花     |
| 5. 電話台    | ⑤造花     |
| 6. 籐の椅子   | ⑥造花     |
| 7. 記録机    | ⑦造花     |
| 8. 本箱     | ⑧造花     |
| 9. 流し台    | ⑨ダッコチャン |
| 10. 飾り台   |         |
| 11. 診察ベット |         |
| 12. スクリーン |         |
| 13. 診察台   |         |

診察ベットとカーテンは「white」、スクリーンはブルー系で「10B 8/4」であった。診察台は緑「5G 4/8」、赤「5R 4/8」、黄「10YR 7.5/6」などの三段の引き出しと外枠は白のワゴンがあった。そ

して、診察ベットの上に緑系「2.5G 5/6」の洋服を着たベビーの写真(30cm×40cm)が2枚飾ってあった。

つまり、診察室では診察台周辺は壁と床の「黄赤」

および造花の「黄」「赤」から暖色系となっていたが、反対に記録機の周辺はスチール机やポスター、造花の「白」「赤紫」などの関係でやや寒色系となっていた。緑の中間色は診察台の三段のワゴンと写真が「緑」であった。

インテリアやポスターなどの配置図は資料1のとおりである。

## 考 察

### 1. 玄関兼待合室について

#### 1) 同一色相の生む色彩効果

病院のみならず助産所においても人・モノ・情報・経営などの総合的な関連によって管理・運営されなければ生き残っていけない時代である。しかし、助産所設備は資金面との関係で容易に改築や増築などできにくい、アメニティの改善はできることから行っていく必要がある。基本的に環境における色彩計画の効果は「1. 秩序を与える。2. 空間を見やすくする。3. 印象を深いものにする。4. 個性をもたせる。5. 構成を明瞭にする。6. エリアを明示する。7. 順路を示し、誘導を容易にする。8. 精神状態を調節する。9. 温度感を調節する。10. 仕事の能率を上げる。11. 素材の特徴をいかし、欠点を補う。12. 機能をわかりやすくする。」などの効果があり、そのあり方は色彩調和がポイントになる<sup>5)</sup>。これらの効果に適合しているかどうかを明確にするためには、色彩の色相・明度・彩度などの三要素から診断の確定をする。それには色彩の数値化は重要である。現存の物体の色彩を数値化すると「ある秩序や原理・法則」が生じていることが発見できる。例えば、対比や配色、色彩の様相間効果、同化効果などが色覚され理解できる。

建築関係やインテリア関係では植栽計画の環境景觀などは目視による方法で樹木の名前・色彩・場所などを明記し、その結果を考察している論文がある<sup>6)</sup>。本事例も同様に実測値から実体の色彩配色について「ある秩序や原理・法則」を見出した時、それが偶発性か計画性かの判断をし、その結果、色彩環境の良否の確定をする方法をとった。それは今後、助産所内の心地よい空間を作りだせる可能性を検討する上に役立つからであり、そこに本研究の意義があると考えたからである。

本事例の色彩診断の結果、玄関兼待合室は木目調を主体とし、「黄赤(10YR・7.5YR)」のブラウン系のベースカラーであった。そこに大きなレザーのソファ(赤系:10R)が置かれているが、このソ

ファの色彩を自由に変化させることはできないが、カーペットやソファカバーなどで色彩環境の変化を楽しむことができる要素をもっている<sup>7)</sup>。本助産院の場合には床や壁などのベースカラー(明度6~7)に高明度で高彩度の進出色である5Yの黄色のソファカバーは8の高明度・13の高彩度で最も進出して見える色が<sup>9)</sup>掛けられたことで明度対比(明度6→8)が起き、その効果はアクセントカラーの役目を発揮し、部屋全体が明るいもてなしのしつらいとなっていた。また、布製のソファカバーから受ける布のやさしさはより一層心地よい空間となっていた。

観葉植物は、人間が自然の一部であることを思い出させるものとして重要であると同時に、人間意識(感情)の平衡感覚を保ち得るためにも「緑」は欠かせないといわれている<sup>8)</sup>。ここではソファカバー(5Y)・黄色の花(5Y)の観葉植物などが、5Yの黄色の同一色相の効果を示し、さらに、床(黄赤:7.5YR)との間には黄色との類似色相の色彩調和を示し、色彩の秩序を保っていたが、これは偶然見られた色彩効果であった。

玄関兼待合室は妊産褥婦以外にもさまざまな人の出入りがあるが、診察室のように医療的要素はないので比較的、助産院の個性を出せる空間ではある。しかし、本事例でわかったことは、単なる個人の嗜好でインテリアを揃えていくと、常によい色彩調和が得られるとは限らない。常に秩序のある色彩効果を得るには、色彩の及ぼす影響を踏まえたインテリアの選択をしていくことが重要であるが、そのためには通常の生活の中で助産師自身が色彩計画をしていく能力が必要となる。

#### 2) 色彩調和と色彩の温度効果

助産院は子ども連れの妊産褥婦がよく来訪することから、子どもへの配慮は欠かせない要素である。しかし、大人用のスリッパは何色にも調和する無彩色(white)である点では違和感はないが、子ども用のスリッパはソファカバーの5Yの「黄」の補色であるブルー系(5B・10B)であることから、補色対比を示し目立っていた。また、ダッコチャン(赤:10R)は壁や床の「黄赤(7.5YR~10YR)」の色相が類似していることから、類似色相の調和が得られている。そして、彩度は14の高彩度の「黄赤」であることと、光沢のあるビニール製であることも左右し、かなり目立つ色彩となっていた。

病院における飾り物の色彩については筆者らが在

院日数39日、大人から高齢者の多い慢性期病棟で色彩計画に基づいた七夕飾りを実施した。病棟全体が木目調を基盤にしたマンション風の病室であったことでブラウン系がベースカラーであった。そこに青・青紫・紫などの補色を主体にした七夕の短冊を飾り、SD法 (Semantic Differential Method) により評価した結果、自宅の室内のインテリアの感覚で七夕飾りを見ており、シックな色彩の短冊に落ち着きを感じ好評であったことから、病棟などの飾り物の色彩は周囲のベースカラーに応じた色彩計画が必要であることがわかった<sup>9)</sup>。ところが、子ども用品やおもちゃはとかく赤・黄・青などの原色の冴えた色彩のものが多く、本事例ではダッコチャンのような高彩度のものは他になかったが、今後は原色のインテリア・小物・おもちゃなどを飾るときは、色彩の統一を図り、まとまりのない無秩序な印象を与えない色彩調和を図ることは大切である。

また、天井に近い高い距離にダッコチャンを飾っていたが、子どもの目には留まりにくい位置にあった。子どもの来客のためのものならば、子どもの目線に落とした位置に飾る方が、看護の視点としては好ましいと考える。ちなみに、5歳ぐらいの子どもを対象とするならば、床上110cmぐらいである。

助産師の理念と使命である「母乳育児を成功させるための10か条」や母親が子どもを抱いたピカソの絵などのポスターは助産所にとって重要であるが、この大きなポスターなどは、5Bのブルー系であることで、壁が寒色系に感じるので季節や貼る場所によっては今後考慮する必要がある。つまり、本事例からわかったことは、大きなポスターを貼る時には色彩のもたらす温度感をも配慮した貼り方をしていくことだろう。

いずれにしても玄関兼待合室の色彩診断は床や壁、小物などは暖色系、ポスターが寒色系、観葉植物が中性色系と「赤、黄、緑、青、紫」などの5色の基本色相 (マンセルシステムにおける基本色) が揃っていた。

## 2. 診察室について

### 1) 色彩の癒し効果

アメリカの病院などでは1989年頃から色彩デザインによって環境の質、美しさ、心地良さを含めて人間生活向上に寄与するようになり、カーテンやベットカバー、タオルなどの色や柄を患者に選ばせ癒しに配慮しているという<sup>10)</sup>。本院では診察ベットや記録机などからもたらす医療的な冷たさを避けるため

に、8箇所には造花を飾ることで心の安堵や癒しを考慮していた。尾崎真理によれば<sup>10)</sup>、色彩はこの造花のように容易に癒しの場を作り出すための重要な要素となる。また、他の設備投資に比べると比較的少ない投資で効果を上げられる利点もあるが、色彩設計は難しく専門家に依頼すべきだが、わが国ではそうした専門家も少なく、医療福祉施設における色彩に関しては、まだ、研究の途上にあり今後の研究に期待したい点があるという。色彩は癒しの場を提供しやすい要素になることを助産師は認識しておくことは重要であり、かつ色彩を配慮する意識をもつことも大切である。

小室克夫によれば、病院では自然な光景が見せられない時の代わりに病室に植物をよく使用するという<sup>11)</sup>。しかし、診察室は前述したように花のみの造花が置かれ観葉植物はなかった。正常経過をたどっている妊産褥婦が通院する助産院という特性の診察室ということでは、長期入院をして自然な光景を見ることができない病人とは異なり、必ずしも観葉植物を置く必要性はないのかもしれない。ところが緑系の色相に関しては、25Gの緑系の洋服をきたベビーの写真を2枚、診察ベット上の天井に近い壁に貼り緑の色相を補い、「赤、黄、緑、青、紫」などの5色の基本色相が揃っていた。

通常、病院では自然な光景が見られない時の代わりに水や風景のような自然物や自然の光景の絵画・写真・壁画などを見せることが重要となり、人物をテーマに求めないという<sup>11)</sup>。しかし、本事例では前述したように玄関にある「母親が子どもを抱いた」ピカソの絵、「ベビー」の写真などのように、助産院では母親や子どもをテーマにした絵画や写真を好んで貼っている点では、病人とは大きな相違を認める。これは産科領域における特徴であるのかどうかは今後検討していく必要があるだろう。

### 2) 暖色系と寒色系を明示した色彩効果

花のみの造花の飾り方であるが、診察ベット周辺には5Rの「赤」、25Yの「黄」、「白」の暖色系の色相を置き、反対に記録機の周辺では5RPと10RPの「赤紫」、「白」の色相を置いていたが、ここには5PBの机や5B・10Bのブルー系のポスターがあったことで寒色系のゾーンとなっていたことがわかった。即ち、診察室に造花を飾ったことで、医療的な感覚を和らげ暖色系となっていたが、ポスターの作用で寒色系となり、1つの部屋が2つのエリアゾーンの雰囲気構成していた。

尾崎真理によれば、病院の室内部に使用される色彩設計のコンセプトはすべて「落ち着き」「おだやかさ」「ほっとする温かみ」をもった色調とし、低刺激で自然色を使い院内に閉じ込められたという感じのない色彩の配慮をするという<sup>10)</sup>。つまり、「落ち着き」のある色彩は低明度・低彩度の色相が好ましく、「おだやかさ」のある色彩は高明度・中彩度の色相となる<sup>4)</sup>。また、「ほっとする温かみ」のある色彩は暖色系の色相となる<sup>4)</sup>。助産院の診察室の色彩もこれに類似すると考えるならば、診察室の色相は玄関兼待合室と同様に「赤、黄、緑、青、紫」などの5色の基本色相を有したが、診察側は前述したように暖色系を示し、温かみを感じる空間となっていた。これらの色相の明度や彩度について見ると、造花の明度は3（低明度）～8（高明度）、彩度は4（低彩度）～14（高彩度）と共に幅があった。壁や床などは6～5（中明度）、彩度は6（中彩度）～10（高彩度）と高彩度の色相がベースカラーに存在することで、必ずしも落ち着いた色彩環境とはいえない。しかし、同じ診察室内の記録側は5B・10Bの寒色系のポスターの影響で、寒色系のゾーンとなっている。寒色系の色相は鎮静効果<sup>4)</sup>を与えるので、静かさのある空間として保たれていると考えてよいだろう。つまり、本事例では、診察側は暖色系で温かみを出し、記録側は寒色系で鎮静さを出し、用途により自然に雰囲気を変えて利用していたことがわかる。

ところが、ポスターは張り替えるとその内容によ

表2 色彩の様相間効果

色の軽重	軽い	●高明度な色調のカラー 黒>赤>青>黄>緑>橙>白	明度
	重い	●低明度な色調のカラー	
色の硬軟	軟らかい	●高明度な色調のカラー ●白が最もソフトなカラー	明度
	硬い	●低明度な色調のカラー ●黒が最もハードなカラー	
色の暖寒	暖かい	●長波長のカラー ●暖色系のカラー（赤、橙、黄） ●彩度が増すと暖感も増す 緑<青<黄<橙<紫<赤	色相
	寒い	●短波長のカラー ●寒色系のカラー（青緑、青、青紫） ●彩度が増すと冷感も増す	

東京商工会議所編：カラーコーディネーター検定試験1級テキスト、226、中央経済社、東京、1998

り変化するので、ポスターの色彩の状況によっては掲示する場所を考慮しなければ、落ち着きのない色彩環境が生じることも念頭においておかなければならない。ちなみに、色の様相間効果は表2のとおりである。

## 結 論

建築物やインテリアなどでは、1事例であっても作品そのものが成果物となるが、本事例はそれに相当した家屋ではない。しかし、助産師が助産管理をしていく視点で生活用品をも含めた色彩診断を実施し、助産院のアメニティの改善を思考したことに、本事例の意義があると考えられる。

本事例の色彩診断の結果をまとめると、以下のとおりである。

〈よい色彩環境と考えられた点〉

- 1) ソファカバーの活用でアクセントカラーの効果を演出でき、かつ、布のやさしさを出していた。
- 2) 造花で癒しの空間を作っていた。

〈本事例でわかった点〉

- 1) 人形（ダッコちゃん）や子ども用スリッパの色彩は目立っていた。
- 2) 人形（ダッコちゃん）は子どもの視線にあっていなかった。
- 3) 大きなポスターは周囲の色彩環境に影響していた。
- 4) 診察室は暖色系と寒色系の2つで構成されていた。
- 5) 産科は短期入院であることから自然への触れ合いの観葉植物という意味は薄く、置物の効果として飾られている。
- 6) 病人は母親や子どもなどの人物をテーマにした絵画や写真を好まないが、産科領域では好んで貼っている。

以上のことから、今後留意すべき点は以下のとおりである。

〈今後留意すべき点〉

- 1) 観葉植物の有意義な活用をすること。
- 2) カーペットやソファカバーなどで色彩変化を楽しめるが、その素材にも留意すること。
- 3) 色彩の散乱を防止し、空間内の色彩秩序を保つこと。
- 4) 子どもなどを対象にした物の場合には、対象者の視線にあわせた色彩計画をすること。
- 5) 癒しの環境作りに造花は手軽に利用できる。

6) 大きなポスターを貼る時には、その色彩の影響を考慮し添付場所を選択すること。

7) 診療場所の色彩は色相より彩度には留意し、「落ち着き」「おだやかさ」「ほっとする温かみ」などを得られるような工夫をすること。

助産所の対象となる妊産褥婦は若い女性でマタニティ雑誌などによる情報にも敏感であり、周産期医療では他科より早くからアメニティが重視されてきた<sup>12)</sup>。現在ではアメニティを無視して周産期医療は成り立たないと言える。助産所も当然その影響を受けるので、身近にできることからアメニティへの改善をしていくことであろう。

それには色彩診断を踏まえた色彩計画・色彩実践へ向けた色彩設計が実行されることである。助産師として色彩に関心を持ち実践の場で役立つ色彩活用をしていけるようになっていくべきだろう。しかし、助産師教育の中に色彩の原理や活用法などを含めた色彩教育の教科はないのが実態であり、それは今後の課題であろう。

## 文 献

- 1) 医療経済研究機構編：医療白書 1996年版, (152-153), 日本医療企画, 東京, 1996.
- 2) 武谷雄二, 前原澄子：基礎所産学 助産学概論, (171-172), 医学書院, 東京, 2001.
- 3) 色彩士検定委員会：Color Master, 43, 全国美術デザイン教育振興会, 東京, 2000.
- 4) 富山真知子・野坂瑛子：はじめての色彩学, (57-59), 有限会社スタジオHOW, 東京, 2000.
- 5) 社団法人・全国服飾教育者連合会：ファッションコーディネート色彩能力検定, (75-76), 東京, 1999.
- 6) 川元邦親：環境景観の向上のための植栽計画に関する研究, 日本インテリア学会論文報告集, 12号 (37-42), 2002.
- 7) 星 和夫：癒しの環境作り, 病院設備, Vol 44. No 4, 248 (465), 2002.
- 8) 河口 豊：環境とグリーンホスピタル, 病院設備, Vol 44. No 4, 248 (474), 2002.
- 9) 小野清美, 林 優子, 山岡聖典：慢性期および急性期におけるアメニティに関する比較研究－岡山旭東病院の七夕行事における色彩の工夫と患者への癒しの試み－, 日本インテリア学会論文報告集, 12号 (43-47), 2002.
- 10) 尾崎真里：医療福祉施設における色彩デザイン, 病院設備, Vol 44. No 3, 247 (22-27), 2002.
- 11) 小室克夫：患者利便設備・機器の安全対策, 病院設備, Vol 40. No 5 (462), 1998.
- 12) 竹村秀雄：周産期におけるアメニティの限界と経済効果, 周産期医学, Vol 30. No 6 (691), 2000.

## Color environment of maternity centers – Visual measurements of consultation and waiting room areas –

Kiyomi ONO, Hiroyuki OKUDA, Mictiko MITSUOKA<sup>1)</sup>

### Abstract

Color has not been focused on in the management of maternity centers, but is a factor that can help to establish a good environment. Therefore, we carried out a visual assessment of the color environment in the consulting room and hall/waiting room of M Maternity Center. It was found that the center used the colors of sofa covers, foliage plants, and artificial flowers effectively and that the colors of dolls and backless slippers were bright. In addition, large posters strongly influenced the ambient color environment. Consequently, the following seven items should be considered in the production of a good color environment.

- 1) Effective utilization of foliage plants.
- 2) Correct choice of materials as well as colors for carpets and sofas in order to give a good feeling to patients via color changes.
- 3) Maintenance of color regularity of the space by preventing color scattering.
- 4) Consideration should be given to children's views in color planning when the objects are to be used by children.
- 5) Active utilization of artificial flowers to produce a stress-relieving environment.
- 6) Correct choice of location for posters by considering the influence of their colors when large posters are hung.
- 7) Consideration of the shade, rather than the hue, of the color in the consulting room so that patients feel "calm", "peace" and "stress-relieving warmth".

---

**Key Words** : maternity center, color, amenity

---

Faculty of Health Sciences, Okayama University Medical School

1) Mitsuoka Maternity Center